

上園遺跡 (第13次調査)

大野城市教育委員会



竪穴建物



粘土の出土状況

上園遺跡は上大利3・4丁目に広がる遺跡で、古墳時代を中心に中世までの集落跡が確認されています。

周辺には、6世紀中頃から9世紀初めにかけて須恵器を生産した総数約500基を数える九州最大の窯跡群、牛頸須恵器窯跡が広がり、その北端に位置します。開窯期の窯跡が確認された本堂遺跡第14次調査地は西へ約50m、野添窯跡6号窯跡は南へ約600m離れた丘陵上に作られていました。

上園遺跡第13次調査では、古墳時代後期（6世紀中頃～後半）の竪穴建物14棟、掘立柱建物2棟、土坑などが見つかります。西側の広い空地を東・南側から取り囲むように建物群が広がり、空地のそばに掘立柱建物、その外側に竪穴建物が配

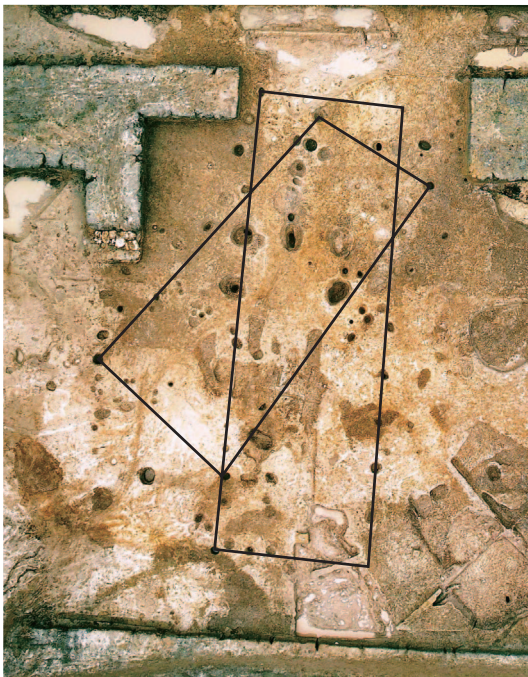


置されています。竪穴建物は、一辺4～5mの平面四角形で、主柱穴やカマドがあることから一般的な居住空間である一方、特殊なものも見つかりました。一つは建物の床や床に掘り込まれた土坑の中から、須恵器の材料となる精良な灰白色の粘土が出土しました。さらに、窯跡で見られるような、焼き歪んだり、焼き上が

りが悪かったり、他の土器がくっついた須恵器が出土しました。掘立柱建物は、長さ11m、幅5mを超える長大なものが見つかりました。建物の中には、須恵器の材料となる粘土を貯蔵した土坑やロクロピットが見つかりました。ロクロピットとは、須恵器を製作する時に使われるロクロを据え置いた穴で、そこにロクロがあった証拠となります。

須恵器製作のサイクルは、粘土素地の生成—須恵器成形—乾燥—焼成—選別・廃棄の各工程からなります。上園遺跡の竪穴建物は居住空間の他、須恵器の材料粘土の保管場所や須恵器の失敗品の廃棄場所で、掘立柱建物は、須恵器を製作し、乾燥した工房と考えられます。さらに、近くの窯に運ばれ焼成されたものと考えられます。

このように、上園遺跡第13次調査と周辺の窯跡の調査成果から、九州一の須恵器生産地となる牛頸須恵器窯跡が操業を開始した当初の須恵器製作や窯跡操業の各工程、工房の具体的な様子が明らかとなりました。



掘立柱建物



ロクロピット